



捕鯨図(市指定文化財)

68

## 司馬江漢「捕鯨図」

2艘の勢子船に分乗した漁師が、潮を吹きながら逃げる鯨を追いつめる場面が描かれています。舳先に身構えた羽差(鉦師)はまだ鉦を握ったままですが、その落ちつきぶりと、水夫の力強いこぎぶりが、つながれている綱もたくさん装備された船の様子からは、この直後の鯨の運命を想像するに余りありません。

画面の右上には「江漢司馬峻写」の落款があります。その下に書かれた横文字のサインはオランダ語で、「日本における最初のユニークな人物司馬江漢」を意味するものです。

この画の作者司馬江漢(1747〜1818年)は、まさにユニークな経歴の人物でした。本名を安藤、名を峻といい、不言道人、春波楼などと号しました。江漢は初め、浮世絵師鈴木春信について浮世絵を学んでいます。浮世絵は役者絵や美人画などを描くもので、日本で独自の発達を遂げ、中国を紹介してヨーロッパへ伝わると今度は印象派の画家たちに影響を及ぼし、それはジャポニスムと総称されました。

江漢は後にその浮世絵から写生画に転向し、平賀源内(1728〜79年)と交流、師事して銅版画や油絵を描くようになります。

江漢の油絵を当時のヨーロッパの画家の作品と比較してみると、未熟な点も多く、どちらかといえば和洋混淆といった趣です。しかし、鎖国下の日本人にとって、初めて見た異国情緒あふれる洋風画は新鮮であったでしょう。江漢の作品は当時の大名や知識人に愛好され、日本における洋風画の開拓者と

して、その名は広く知れ渡ることとなりました。

この「捕鯨図」には洋風画の特徴をみることができません。人物の顔や仕事着には陰影を付けることで立体感が表現されています。白いしぶきを上げる波の荒々しさは写実的で、伝統的な線描による波の描き方とは異なるものです。江漢は天明8(1788)年12月、実際に肥前(佐賀県)生月島で鯨漁を見物しました。空の描写からは、この日の風の強さも伝わってくるかのようです。庄巻はおびえた鯨の表情もありません。

「捕鯨図」は江漢が最初ではなく、勇壮な漁の現場は17世紀前半から描かれてきたものでした。しかし、画面自体は目新しくなくても、伝統的画法による鯨を見慣れてきた江戸時代の人々に、油彩という西洋の技術による迫真の鯨の表現は、驚きをもって歓迎されたものと思われ、江漢は複数の捕鯨図を残しています。この「捕鯨図」は、土浦藩士の家(真鍋六丁目・露木家)に藩主からの拝領品として代々伝えられ、このたび市に寄贈していただいたものです。斬新で珍しい絵画として家臣に下賜されたのかもしれない。

江漢が寛政4(1792)年に作った「地球図」は、日本初の銅版印刷図であり、また文化7(1810)年には漆塗りの地球儀(永青文庫所蔵)も制作しています。江漢は日本における地図製作史上にも大きな足跡を残しています。

「捕鯨図」は、博物館展示室3で9月末までご覧いただけます。

市立博物館(☎824・2928)

